
愛を忘れた女神

葉月 蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を忘れた女神

【Nコード】

N2204K

【作者名】

葉月 蘭

【あらすじ】

美桜は二年目の結婚記念日を終え幸せな毎日を送っていた。

三月、ようやく高校を卒業し家族三人で暮らせるようになった矢先、夫・達哉が撮影中の事故で意識不明の重体に。急いで駆けつけるが、願いも虚しく達哉は帰らぬ人となった。

大切な人を失った彼女は三年後、墓地公園でひとりの青年と出会う。

プロローグ

冷たい雨が降っていた。

この雨が上がれば春が来るようだ。

季節は巡る…たとえ私が立ち止まっても、時間は止まってくれない。

今年もまた、春がやってくる

春が近づき若い夫婦は新居への準備に追われていた。一年遅れの高校生活がようやく終わり、両親に甘えてばかりだった毎日にさよならする日がそこまで来ていた。

「美桜、このテーブルどこに置くんか？」

「ちよっと!!! それは運ばなくていいわ、とりあえずダイニングの空いているところに置いていて。後で動かすから、重たいものや大きなものには触らないでね」

夫の達哉はモデルの仕事をしているため怪我に繋がるようなことはさせられなかった。うっかり顔に傷でもつけければ大変だ。

メイクである程度は隠せるが、ちよっとしたことがそれこそ命取りになる。

「怪我でもしたらどうするの？」

「これぐらいのこと大丈夫だよ、一応男なんだし…もうちよっと頼りにしてくれよな」

美桜は子供を産んでからすっかりたくましくなった。いまや「母の顔」である。

いつでもモデルとして復帰できる顔をスタイルを持ち合わせてい

だが、娘の葵と過ごす時間が少なくなるからと言って断っていた。
そんな妻に対して「もったいない」と言い続けていた。子育てをしながらモデルを続けている人はいまだき珍しくない。それでも美桜は首を縦には振らなかった。

広い空間にある程度家具が運び込まれると、そこは部屋らしくな
った。

ソファに腰かける夫に「一休みしましょう」と紅茶を運んだ。ま
だ調理器具などが片付いていないため夕食は外食になりそうだ。

「ありがと、美桜も休みなよ」

まもなく二歳になる娘と遊んでいた達哉は手を止め、まだダイニ
ングで動いている美桜に声をかけた。彼女は軽く返事をして手を洗
った。

「せつかく新居に越してきたのに、明日から撮影かあ。タイ
ミング悪いよなあ」

「三泊でしょ？ そんなのすぐよ。葵と待ってるからね」
ねー、と言つて幼い娘と顔を合わせた。

達哉は明日から雑誌の撮影で家を留守にする。海外での撮影も決
して少なくないため家を空けることが多い。そのため新居も美桜の
両親が住む家から歩いて十五分のところに借りた。

美桜の父親が経営する「赤嶺クリニックス」からも近く安心とい
うわけだ。達哉が発したとなればすぐにでも母親が訪ねるだろうこ
とは想像できた。

「お土産、楽しみしてるわね」

永遠の幸せを疑わず、いつものように夫の姿を見送った。

海外撮影用のキャリアケースを引っ張りタクシーに乗り込んだこ
とを確認すると、娘と一緒に見えなくなるまで外にいた。通り抜け
る風になぜだか嫌な予感が混ざっていた。

達哉が帰ってくる予定になっている日の朝、事務所から電話があった。たまたま泊まりに来ていた母が対応したが思いがけない言葉を聞かされた。

「…達哉さんが、撮影中に事故に遭ったって…」

「…う…そ…」

聞かされた現実が突然すぎて、うまく呑み込めない。泣きながらその場に崩れ落ちた。母はなんとか正気を保たそうと励ましの言葉を送ったが、美桜の耳には届いていなかった。

電話を切った後、父の運転する車に乗り事務所へと向かった。詳しい話を聞くためだったが彼女は小さく震えていた。隣に座る二歳の娘はまだわかっていないのか、不思議そうな顔で美桜のことを見ている。

意識不明の重体らしい…

そう聞いたとき意識が遠のきそうだった。

国内の撮影ではないため、今どのような治療が行われているのかはつきりとはわからない。それが余計に不安をあおった。

こんな大事なときにそばにいられない自分の身を呪った。いても立つてもいられない美桜は病院の場所を確認するとすぐにでも出発すると言い出した。

帰宅し荷物をまとめると娘の葵を両親に預け、空港へと向かった。

だが、美桜が病院に着いたとき達哉は息を引き取った後で、病室にその姿はなかった。

傷ひとつない綺麗な顔は眠っているように見えたが、近づいてよく見ると青白く、触ると弾力のない氷の塊のようだった。

間に合わなかった。苦しい思いをしている夫に何もしてあげられなかった。

静かな廊下でひとり、涙を流した。

どんなに泣いても優しく抱きしめてくれる腕は、そこにはなかった。

プロローグ（後書き）

新連載、スタートしました。

切ない純愛系になると思いますが温かい目で見守ってくださいませ。
前作「放課後」に登場した美桜の物語ですが、単体で楽しんでいただけるとは嬉しいので、よろしくお願いします。

1 - 想い -

あれから三年が経とうとしていた。

まわりは春が待ち遠しいと言っけれど、私は嫌だった。

あの人の記憶がだんだん薄れていくのが恐かった。春が来るたびに苦しくなった。

「赤嶺さん、これ院長のサインがまだなんだけど…もらってきてくれる？」

「はい、わかりました」

クリニックの受付で書類の束を受け取った美桜は、従業員用の扉から院長室へと向かった。入院施設のない個人クリニックのため、診察室が三部屋と処置室が並んでいて、その奥に院長室と言われる個室があった。

クリニックの専門は外科・整形外科だが、週に三度・午前中のみ内科の医師が来ることになっている。この季節は花粉症に悩まされる患者が多いのか、午前中の受付はいつでもいっぱいだった。

院長室の扉をノックすると、中から低い声の返事が聞こえてきた。院長とは言ってもほとんど患者は診ない。経営者としてクリニック内にいるが実際に患者を診ているのは雇われている常勤二名の医師だった。

「失礼します」

室中では書類の山に囲まれた院長が、難しい顔をして座っていた。その理由は詳しく聞いていないため知らないが、美桜はとりあえず自分の仕事をこなすために話しかけた。

「院長、こちらにサインをいただきたいんですが…」

「…美桜、親子なんだからそんな他人行儀はよしてくれないか」

「一応職場ですから…他の従業員の目もあるのでそういうことは言わないでください」

手に持っていた書類を机の上に置く。優先順位からいってどの書類から頼めばいいのかわからないため、あとは院長に任せるようにして待つことにした。

どうせ受付に戻ったところで大した仕事はさせてもらえない。一年ほど前、ようやく夫の死から立ち直りかけた美桜が仕事に行くと言い出したとき、両親は過保護なほど心配して外には出せなかった。結果、父のクリニックで働くことになったが従業員は温かい目で迎えてはくれなかった。美桜の勤務は週に三日、時間になると数時間程度で雑用や院長への頼みごとを渡されるくらいだった。

サインをする書類に目を落としたとき、院長の手がふと止まった。

「…そうか、もうすぐ三年か…」

書類のどこかにその日付が印字されていたのだろう、サインするのも忘れ当時のことを思い出していた。美桜は小さな声で「はい」と答えそれ以上のことは何も話さなかった。

「…墓参りにはいつ行くつもりだ？」

「…今度の休みにでも行くこうと思ってます。ただ、葵を連れて行くかは決めてません」

達哉が事故で亡くなった後、両家の意向で美桜は旧姓である「赤嶺」に戻るようになった。いつまでも亡くなった人間に縛られないで欲しいと強い要望があり、美桜本人の意見や気持ちは聞き入れてもらえなかった。

達哉の実家である鷹城家たかしろから籍を抜かれて他人となった美桜は、ひっそりと墓参りに行くことくらいしかできなかった。

「葵はまだ早いんじゃないのか？」

それに対して返事はしなかった。

今年五歳になる娘の葵は未だ自分の父親が事故で他界したことを聞かされていない。まだわからないだろうとまわりは言うが、美桜には納得できなかった。

幼い我が子が「パパは？」と聞くのに、仕事で遠くにいるのよ、と嘘をつくことが苦痛だった。いつか話さなければならぬ、だがまだ先でいいのでは、と議論は堂々巡りだ。

今年もおそらく美桜が墓参りに出かけようとすると、母親が葵を連れて行くことを拒むはずだ。去年同様ひとりで出かけることになるだろうと思いを廻らせていた。

「できたぞ」

いつの間にかサインの終わった書類を手渡された。

頭を下げて院長室を出ようとすると、何か言いたそうな表情で美桜を見つめていた。だが、わざと視線を逸らし気が付かないフリをして美桜は廊下へと出た。

扉が完全に閉まったのを確認すると「はぁ」と溜息を吐いた。

ひとり残された院長はいつまでも達哉にこだわる娘のことが心配だった。もう三年だ、そろそろ墓参りに行くこともやめてもらいたいと思っっている。

美桜はまだ二十三歳だ、同年代の女性は恋をして家庭を持つ。だがそれに対して美桜はすべてを諦めてしまっている。以前のような明るい笑顔は見られなくなっていた。

いつか美桜にも新しい幸せが来ればいいのに。そう願っていた両親だったがその想いも虚しく当の本人の心には他の人が入り込む余

裕はなかった。

「じゃあ…行ってくるね」

三月の第三日曜日、美桜はひとりで墓地へと向かった。相変わらず娘は「どこへ行くの？」と何度も美桜に問いただしていたが、その度に母がなだめていた。大事な用だから葬は留守番と言われそれ以上駄々を捏ねるようなことはしなかった。

外は雨が降っていた。

と、言っても霧のような小雨で傘をさすかどうか迷うほどだ。しかしまだ肌寒いこの季節に風邪をひいてはいけないと、真っ赤な傘を開いた。

薄暗い空の下、一輪の花が咲いたように鮮やかな色だった。

#2 - 傘の下 -

電車を乗り継ぎ墓地公園の最寄り駅から歩き、途中で生花店に寄り花束を買った。

それはまるでプレゼントのように華やかで、とても献花とは思えないほどに豪華で季節の花がひしめき合って美しい姿とほのかな香りを放っていた。

道行く人の目にはおそらく、誕生日プレゼントのように見えていることだろう。見目麗しい彼女を誰もだ振り返りながら見ていく。だが、美桜は気にせず歩いた。

愛する人に贈る花束。

それ以外に意味はなかった。

墓地公園は都心から離れた港街にあった。

そこは宗教・宗派問わず多くの人が眠る場所で、小高い丘のようになっている。低い墓石は等間隔で列を成し、空を仰ぐように建てられた石はまるで眠っているように見える。

その間をゆつくりと進み、見慣れた名前が刻印されている場所にたどり着いた。青い芝生は小雨のせいかわずかに露を持っていて、踏み入ると足元で弾けた。

達哉……

傘を閉じ持っていた花束をそつと置いた。すでに多くの花が添えられていて、美桜が重ねた花束の華やかさも一瞬にしてまわりに馴染んだ。

もう、何度足を運んだか覚えていない。

命日や達哉の誕生日はもちろん、ふたりの記念日にも美桜はこへやってきた。不意に淋しくなり、会いたいという感情がセーブできないときにはここで心を落ち着かせていた。

でもそれが逆効果になることのほうが多かった。

もう達哉が帰ってこないという現実を突きつけられるだけ。忘れることも前に進むことも出来ず、ただ過ぎた日を悔やむ毎日。

何がいけなかったのだろう、どうすればよかったのだろう、そんな自責の念に囚われてこの三年を過ごした。いつか楽になるのだろうか、いつか笑える日が来るのだろうか、と。

逢いたい……

湧き出る感情は苦しくて、どうにもならない想いに心は押し潰されてしまいそうで、世界が足元から崩れそうな感覚になる。

どうして、私を置いて逝ってしまったの……

答えが返ってくることはない質問に、美桜は哀しみを増やすばかりだった。

いつしか雨は霧のような小雨から、雫が滴る強い雨に変わってきた。それでも傘もささずに夫の名前をじっと見ていた。涙が流れていたが雨とともに地面に落ちていた。

花束のナイロンに弾いて雨音がパチパチと音を立てて踊っている。ふと、自分の頭上から雨粒が落ちてこないことに気が付き顔を上げた。視線の先にはひとりの青年が美桜を包み込むように、傘を差し出していた。

「…風邪、ひきますよ」

とても優しい穏やかな声だった。
傘を持った反対側の手でハンカチを取り出し、そつと手渡した。

「あ…ありがとうございます…」
静かに受け取ると、濡れた頬にそつとあてた。

自分が泣いていたことに気が付き、とっさに顔を背けて足元に置いてあつた傘を手にした。渡されたハンカチで軽く顔を拭くと改めて頭を下げた。

「ありがとうございます。あの…これ、洗ってお返しします」

「いや、そんなのいいですよ」

濡れたハンカチを取り返そうとした青年の手を拒んだ。

ギョツと握つたまま青年の顔を見ていた美桜は、自分の言った言葉をどう実現すればいいのか迷つた。今日の前にいる青年が誰だかわからない。

達哉の墓参りに来たことは明らかだった。

美桜が涙を拭いているときに隣で花束を置く音が聞こえたからだ。しばらく手を合わせ静かに眼を閉じていたようだった。

達哉の友達…？ 知り合い…？ 身内…？

見覚えのない顔にいきなり名前を聞くのも失礼かと思い、首を傾げながら考えていた。

どこかで見たことがあるような気がするが、すぐには思い出すことができなかった。

「体が冷えないうちに休憩室まで戻りましょう。早く乾かさないと本当に風邪を引いてしまいますよ」

「あ…はい、じゃあ…」

手を引かれるように歩き出した。

墓地公園の入り口に管理塔がありその中に休憩室がある。レストルームがあるのでそこで濡れた服を乾かし体を温めたほうがいいと言われた。

受付で事情を話すと女性従業員が個室に案内してくれた。礼拝堂の隣に建っている塔の中にあり、普段は家族の控え室として使用している場所だった。

濡れた服を乾燥機にかけている間、ドライヤーで髪を乾かしながら鏡を見た。そこに映った顔はメイクが取れかけて酷いものだった。

こんな顔を見せてたなんて…

雨の中傘もささずに佇んでいたこともそうだが、それ以上にみつともない姿を晒したようで恥ずかしかった。かばんからポーチを取り出し簡単にメイクを直すと、借りた服のまま休憩室へと移動した。

窓の外はますます雨足が激しくなっていた。帰りはタクシーを拾わなければ、と考えながら室内に入ると中央のテーブルでカップを片手にくつろぐ姿が見えた。

青年は美桜に気が付くと立ち上がり笑顔を見せて出迎えた。

「こちらへどうぞ」

イスを引き美桜に座るよう促した。

反対側に青年が座ると飲み物を勧められたので、温かい紅茶を運んでもらうことにした。

「気分はいかがですか？ 具合が悪いようなら言ってくださいね、ご迷惑でなければ自宅までお送りしますから」

「…ご親切にありがとうございます。でも…本当に大丈夫ですから」
「そうですか、あなたに何かあれば天国の達哉さんが哀しみますか
らね、美桜さん」

不意に名前を呼ばれてはっとした。

この人は…誰…？

その思いだけが心の中で渦巻いていた。

「あの…どうして私のことを…？」

目の前に座る青年のことを思い出せない美桜は言葉を濁しながら聞いてみた。すると、逆に質問されることになってしまった。

「僕のこと、覚えてませんか？」

「え？ えっと…達哉さんの…お知り合い、の方…？」

やはりどこかで見たことがあると思っただのは記憶違いではなかったようだ。だが、そう言われてからも思い出すことが出来ない。

どこで、会ったのかしら…？

思い当たる記憶の扉を開けてみたがわからなかった。

「…直接お会いしたのは一度だけ、達哉さんの葬儀で。でもそれ以外にも何度かお見かけしたことはありますよ、よく学園で一条先輩と一緒にいたのを覚えてます」

「え…？」

台詞の後半は美桜にとって意外なものだった。

私立・桔梗学園は二年の途中まで通っていた学園だ。だが達哉と交際して初めての夏休みに妊娠が発覚し、自主退学した学園でもあった。

その学園生活のほとんどは、親友であった一条瑠璃いちじょうるりと過ごしていた記憶しかない。多くの生徒は幼稚舎、もしくは初等部から入学するにも関わらず、親の薦めで高等部から入学したため友人は少なかった。

その瑠璃とも退学してからはメールのやり取りくらいで、もう長く会っていない。確かパリの大学に入学したと聞いたが卒業後の動向は聞かされていなかった。

久しぶりに懐かしい友人の名前を聞いた美桜だったが、それでも青年のことはわからなかった。

「…学園にいたときは一条先輩にご迷惑をかけました。覚えてませんか？ 掲示板騒動があったのを。あれ、僕なんですよ」

当時のことを思い出したとき、彼の名前も思い出した。

そう言えば…

でも、なんだか感じが違うみたい…

二年に進級して間もなくのころ、学園一の美少年と言われた先輩と付き合っていた瑠璃は様々な妨害行為を受けていた。その中でも大きな騒ぎになったのが「掲示板騒動」だ。

瑠璃を陥れるような写真と怪文書が貼りだされた。その相手となっていたのが彼、日下大輝くさかたいきだった。先に見つけた美桜は瑠璃に知らせたが相手の顔までよく覚えていなかった。

確か、下級生だったはずじゃ…

美桜がそう思うのは無理なかった。

今、目の前で話している青年はどう見ても美桜の年下には見えな
い。おそらくはまだ大学生のはずだが、そういった雰囲気は一切感
じ取れなかった。

「…なんだか、意外です」

「そうですね？ まあ、あれは従姉に頼まれてやったことですから

「いえ、そうではなくて。とても私の年下には見えなかったの
てつきり達哉さんの友人かと思っていました。でも、葬儀のときは
…ごめんなさい、よく思い出せなくて」

達哉の事故後、葬儀の際はまだ「妻」の席に座っていた美桜の元
にはかなりの人が挨拶に来ていた。実はふたりの結婚は当初反対さ
れていて、達哉の両親は良く思っていなかった。

子どもが出来たために渋々了解してもらったが、結婚後は達哉も
実家にはそれほど出入りしていなかったようだ。

「いえ…親戚筋が多いですからね、鷹城家は。僕も叔父さんたちと
は久しぶりに会いましたよ」

「達哉さんのご親戚の方でしたか…でも苗字が、たしか…」

「鷹城家は母の実家なんです。まあ普段はほとんど交流はありません
けどね」

大輝の家に比べ鷹城家は家格が落ちるような言い方だった。

それでも達哉の実家がそこそ良さ家だと知ったのは葬儀のときだ。
美桜の実家とは比べ物にならない現実を垣間見た。どう振舞ってい
いのか困惑したのを覚えている。

自分をつくづく場違いな学園に入学し、格の違う家柄の人と結婚
したのだと思い知らされた。現代社会では身分の差はないが見えな
いところに根深く残っているのだと思った。

「美桜さん…鷹城家にはもう出入りしていないんでしょう？」

「え？…ええ、まあ…」

交流は少ないとはいえ親戚筋だ、美桜が鷹城家から籍を抜かれて
いることは知っていて当然だろう。だが、はつきりと言葉にするこ

とは出来なかった。

美桜の中にはまだ達哉が生きている。

自分が妻でないと公言するのは、自分の中に生きている夫を否定する気がして嫌だった。

そして、まわりの人間からそう言われることも強く拒絶した。

「あれからもう三年ですね。美桜さんは…まだ達哉さんのことを想ってるんですか？」

「ええ、未だに彼がこの世にいないなんて考えられません。もしかしたら笑顔で戻って来るんじゃないか…って、そう思うこともあります。本当に…まだ信じられません」

胸の想いを打ち明けるのは初めてだったかもしれない。

両親が腫れ物を触るような目で美桜を見ることがあるため、家で達哉の話は出来なかった。ほぼ初対面の彼に、どうしてそんなことを話したのか自分でもわからなかった。

大輝は「もう三年」と言った。だが美桜にとってはあの事故の日から時間は止まったままだった。未だ過去のことには出来ないで苦しんでいた。

いつか心が癒される日は来るのだろうか、と考えるがそんな日は永遠に来ないのではないだろうかと思うことのほうが断然多かった。

窓を打つ雨はまだ激しい音を立てていた。

しばらく会話が途切れた。

美桜は窓の外を見ながら達哉のことを思い出していた。大輝はそれを察したからか、かける言葉を見つけないことが出来なかった。

その横顔は今にも泣き出しそうで、触れれば壊れてしまいそうなほど脆いものだった。

「お待たせしました」

沈黙を破ったのは他でもない、墓地公園の管理塔にいる女性従業員だった。

美桜の濡れた服が乾いたようで呼びに来たのだ。気まずい雰囲気の中で息苦しい思いをしていた美桜は救われた気がした。

「…では、日下さん…わたしはこれで失礼します」

着替えた後は立ち寄らずに、公園の入り口でタクシーを拾って帰ろうと思っていた美桜は丁寧に頭を下げた。濡れたハンカチのことが気になっていたが、帰れば住所はわかるだろうと考えた。

背中を向け歩き出そうとした美桜に大輝は声をかけた。

「ご自宅までお送りしますよ、ここで待ってます」

どう返事をすればいいのか考えていたが、前に行く従業員と目が合い断りきれないまま休憩室を後にした。扉を閉めるとき振り返ったが、大輝は美桜の顔は見えていなかった。

着替えた後、そ知らぬふりをして帰ろうかとも考えた。

達哉の死後、男性とふたりきりというシチュエーションは経験していない。あえて美桜のほうから避けていたといったほうが正しい

かもしれない。

職場で同僚や先輩たちは飲み会を積極的に開催していたが、院長の娘というのがあったからか美桜が誘われることはなかった。仮に誘われていたとしても断っていただろうが。

どうしよう……

考えすぎかもしれない、ただ家まで送ってもらっただけ。それだけなら何も問題のでは、と誰に対してかわからない言い訳をしていた。美桜が過剰なほど男性を警戒するのには理由があった。それは誰かに心を奪われると達哉を忘れてしまうのではないかという思い。忘れたくない、忘れなければならぬ……そんな矛盾した思いがいつまでも離れなかった。

着替えを済ませ、鏡を見ると「ふう」と溜め息をつく。

予定より遅くなってしまったので家に電話をかけることにした。

「……もしもし、お母さん？ 美桜だけど……遅くなったけど今から帰るから」

『まだ墓地公園にいるの？ ずいぶんかかったわね、何かあった？』

「え、うん……達哉さんの知り合いに会って、少し話してたから。でも、もう帰るから」

『そうなの？ だったらゆっくりしてきてもいいのよ、葵のことなら大丈夫だから。たまには息抜きしてきなさい』

そんなんじゃないのに……

説明するのも煩わしくなった美桜は適当に相槌をうつて電話を切った。先ほどよりも大きな溜め息が無意識のうちに出た。

窓を打ち付ける雨は少し弱まっていた。

しとしとと降る雨が余計に淋しさを増長させる。ようやく気持ち
が落ち着いていたのにまた涙が出てきた。外では従業員が待ってい
る、慌てて涙を拭き平然を装い廊下に出た。

休憩室までの距離が長く感じられた。

気が変わって待っていないかもしれない、そんなことを考えなが
ら歩いていた。自分でもどうして大輝のことが気になるのかわかっ
ていなかった。

しかしと言うべきか、案の定、大輝は席を立つこともせず美桜の
ことを待っていた。戸惑う彼女を知ってか知らずか、笑顔を絶やす
ことなく近づいてきた。

「さあ、では行きましょうか」

「…でも、なんだか申し訳ないんですが…もう雨も弱まっています
し、ひとりでも大丈夫ですが…」

「僕に気を遣ってるのなら必要ないですよ、それに…あんな雨の中、
ひとりで泣いていたあなたを放っておけません。そう警戒しなくて
も何もしませんよ」

一瞬、哀しげな表情を見せた大輝だったが美桜は気付かなかった。
駐車場までの道のりをずっと押し問答で過ごしたが、結局大輝に
根負けした形で美桜は助手席に座った。年齢に不釣り合いな高級車は
乗り心地は良かったが、居心地は悪かった。

走らせた車の中は小さな音量でクラシックが流れるだけで会話は
なかった。

美桜は流れる景色を窓から見つめ、大輝もただ渋滞気味の道路を
ひたすらに走らせていた。休日の夕方、道路は次第に混みだしスピ

ードが落ちてくると大輝が口を開いた。

「…美桜さん、この後何か予定はありますか？」

「え？ いえ…これといって特には…」

「じゃあ、一緒に食事でもいかがですか？近くにいいお店があるんですが」

美桜は返事をして後悔した。どうして「約束がある」と嘘をつけなかったのか、と。どう言って断ろうかと考えたためしばらく黙ってしまった。

「…僕と一緒にでは…嫌ですか？」

「い、いえ…そういうわけでは…」

黙っていたのを返事だと思ったようだった。だが、美桜もはつきりと言えず口ごもってしまった。

「…その…突然だったので、ごめんなさい。家で娘が待っているので今日はご遠慮させていただきます。せつかく送ってくださいのに…」

「…そうですか、いや、僕のほうこそ無理を言いました」

「そんな…日下さんが悪いんじゃないありませんから」

そのまま黙り込んでしまい、再び車内には沈黙が広がった。先ほどもよりも気まずい雰囲気漂っていた。

「…あの、ここで結構です。後は歩いて帰りますので」

見覚えのある住所が近づいてきて、信号待ちで止まったとき美桜は声をかけた。

大輝が何かを言おうとしたときにはドアに手をかけ扉を開けていた。素早く道路の脇に出ると丁寧な頭を下げて背中を向けた。

大輝は何も言わず車内のバックミラーに映る美桜を静かに見ていた。

助手席には赤い傘が横たわっていた。

#5 - 忘れもの -

車を降りてしばらくすると、再び雨が降ってきた。

美桜はそこで車内に傘を忘れてきたことを思い出す。振り返り目を凝らしたがそこに大輝の車はなかった。諦めて雨宿りをしながらかばんに手を入れた。

出てきたのは大輝から借りたハンカチだ。そこで美桜はふたつの忘れ物に気が付いた。

ひとつめは傘。

ふたつめは大輝の連絡先。

どちらもたいして高価なものではない。だが、自分のものが他人のところにあることを知っていて放ってはおけない。

ようやく乾いたハンカチが再び雨で濡れる。拭きながらぼんやりと考え事をしていた。

どうして、私に優しくしてくれたのかしら…？

なんだか達哉みたいだな…

どこがどう、という訳ではない。なんとなく笑ったときの表情やさりげなく手を差し伸べる仕草が似ていると思った。そして、達哉と出会ったときのことを思い出していた。

あの日も雨が降っていた。

春の雨は意外に冷たくて、慣れないモデルの撮影に戸惑って心細い思いをしていた。

スカウトされたためかなりの自信を持って撮影に臨んだが、まわりのライバルたちは誰を見ても華やかで自信に満ち溢れていて、自

分だけが特別美しいわけではなかった。

その日は男性モデルと合同で撮影が始まった。

ある雑誌での企画ものだ。美桜は新人だったため合同企画には参加しなかったが、自分の撮影の合間にその様子を伺っていた。

やっぱりプロは違うなあ…

そんなことを感じつつも初めての撮影をなんとか乗り切り外へ出た。

雨が降っていると気が付いたのはそのときだった。朝家を出たとき、空は少し暗かったがまだ雨は降っていなかった。母が傘を持つように言うのを「荷物になるから」と受け流し、そのまま外出した。今になって後悔しても遅いが、せめて折りたたみの傘でも持つてくればよかったと空を見上げた。

そのときだった。

「…傘、ないの？」

背後から聞き慣れない男性の声がして振り返った。

「えっと…はい…ない、です…」

撮影所の玄関ロビーからは誰もが知らぬ顔で傘を片手に道路へと歩き出す。

まさか知らない人が声をかけてくれると思っていなかったので、美桜は返事をしながらもうつつむいてしまった。

「これ、貸してあげるよ」

手に持っていた傘を差し出した。

「え？ でも…悪いです。それにあの…あなたが濡れるじゃないですか、私は大丈夫です」

「いいって、俺は車だから駐車場までだし。気にしないで」

そう言つて無理やり手渡された。そして彼はロビーから走り去るうとしていた。

「あ…あの…！！ 次会つたときにお返しします。だから…」

「ああ、また会えるといいね」

眩しいばかりの笑顔を向けて雨の中へと消えていった。

それが、達哉と初めて言葉を交わした出逢いときだった。

小雨になつたのを確認すると美桜は道路へと歩き出した。

相変わらず空は今にも落ちてきそうなほど暗く、いつ大粒の雨を降らせるかわからない。急ぎ足で家に向かった。

「あら、美桜：送つてもらつたんじゃなかったの!？」

玄関を入つたとき、少し雨に濡れている姿を見て母は驚いた。門の前で車を下りたのならこんな濡れないはずだからだ。

美桜は「ちよつと手前で降ろしてもらつたから」と言つてタオルを片手に洗面室へと入つていき、そのまま服を脱ぎ捨てシャワーを浴びた。

浴室を出た美桜はそのまま二階の自室へと入つていった。

大輝の連絡先がわかるものがないかの確認のためだった。達哉の葬儀に参列した人の名簿を手元に置いていた。籍を抜いたとはいえ、どのような形で世話になるかわからないと控えていた。

そこに大輝の名前がなければ学園の同窓生名簿を見ればいい。おそらくはどちらかに載っているはずだと確信があった。

「…あつた」

手にしたふたつの名簿、そのどちらにも彼の名前は載つていた。

ひとり暮らしをしているようではなく今も実家から大学に通っているようだった。

これだけのために、家まで行くのって…どうなんだろう？

やはりケータイの番号くらい聞いておくべきだったと後悔した。大学に行ったとしてもあの広い敷地の中、出会える確立は低いだろう。だが、家の周りをうろろするよりは構内を探すほうが目立たないと思い、次の休みに出向くことに決めた。

部屋の窓から外を眺めると、いつの間にか雨は激しさを増していた。もう少し帰ってくるのが遅ければずぶ濡れになっていたところだ。

車が数台走り去っていくのをぼんやり見ていた。住宅街のためその交通量は多くない。そこに見慣れない車が入ってくるのが見えた。

え…？ あの車…

一瞬、大輝の車と見間違えた。だがそのまま走り去り、降りしきる雨の中へ消えていった。

どうして見間違えたりしたのか不思議だった。彼が家まで知っているわけがない。仮に何かの手段でわかったとしても、傘ひとつのために来るわけなどないのに。

私…どうかしてるわ…

カーテンを引き外の風景を遮った。

彼のことは考えないようにしようと、窓に背中を向け階段を下りていった。

6 - すれ違い -

翌日

雨に濡れたせいか、美桜は熱を出し起き上がれないでいた。ズキズキと響く頭を抱えながらベッドの中でもがいてみるがすぐに息切れし咳き込んだ。

それでもなんとか体温計までたどり着き口にくわえる。ピピッと音がして確認すると表示されていた体温は三十八度：完全に体調を崩した証拠だった。

隣のベッドで葵はまだ寝息をたてていた。

時刻は六時、幼い子が起きるにはまだ早いが自分が動けない分、この子を起こして母親を呼んでてもらおうか考えた。

体を包む熱が思考回路を麻痺させる。思ったことを言葉に出来ないまま時間だけが進んでいた。

「…美桜、どうしたの？ 入るわよ」

いつもの時間になっても下りてこない娘を心配したのか、母が扉をノックし中に入ってきた。

「ちょっと、大丈夫!？」

ベッドから少し顔を出している美桜の様子を見て、すぐに熱があることを察した母は近づくと腰を下ろし、中で悶えている彼女の額に手を当てた。

「熱があるのね、やっぱり昨日濡れて帰ってきたから風邪ひいたんだわ…とりあえず今日はゆっくり休んで、後でお薬を用意してもらいましょう。とりあえず着替えなきゃね」

「…うん、そうする…お母さん、葵が起きたらよろしくね」

「そうね、うつったりすれば大変だわ。下の部屋にいてもらうよう

にするから安心して」

着替えを用意すると何やら独り言を呟きながら、バタバタと階段を下りていった。

よほど騒々しかったのか、隣で寝ていた葵が目覚めました。そしていつもなら起きているはずの美桜がまだベッドにいることに気が付いた。

「…ママ？ どうしたの？ どこかいたいの？」

まだ覚めきらない目をこすりながら、不安げな声で話しかける。

美桜の顔色が普段と違うことに驚いているようだ。

「葵…ママね、お熱があるの。だから、おばあちゃんのところに行つてくれる？」

「やだ、ママのそばにいる」

「ダメよ、葵にお熱がうつっちゃうもの。ママなら大丈夫…おじいちゃんにお薬もらうから、言うこと聞いてね。葵…いい子にできるでしょ？」

それでも離れたくないのか美桜の手を握ったまま動こうとはしなかった。

しばらくして戻ってきた母は葵が起きて美桜のそばにいることを目撃すると、慌てて引き離しなだめるように言い聞かせた。納得できないようだったが渋々扉を閉めた。

温かい部屋と額に置かれた冷たいシート。少しだけ心地よくなってきて美桜はそのまま夢の世界へ落ちていった。

美桜が深い眠りの中に沈んでいるころ

赤嶺クリニツクの入っているテナントビルの地下駐車場に車を止

めた大輝は、エンジンを止めた後も車から降りずに運転席でぼんやり考え事をしていた。

調べてここまで来たものの、どう理由をつけて会いに行けばいいのかを考えていた。

…ばかだな、忘れ物っっていけばいいだろ。

助手席に赤い傘が残されていることに気が付いたのは自宅に着いてからだ。自分とすることがらしくないと思った。

その後しばらくしてから再び雨が降ってきたが彼女が濡れなかったかどうか気になっていた。すぐに気が付いていれば後姿を追いかけていたのに。

とりあえず傘は助手席に置いたまま、クリニックのあるフロアまで歩くことにした。

午前中はどこの病院でも忙しいだろうと察しはついていた。そのため午前の受付終了時間、十一時を過ぎたのを確認してから扉を開けた。

「こんにちは」

受付には女性がふたり座っていたが、大輝の顔を見るなり立ち上がり満面の笑みで挨拶をした。受付時間を過ぎているのだから、患者として来たのではないとわかったようだ。

カウンターの向こうで大輝のことをまじまじと見る彼女たちに興味はなかった。

…あれ…？

確か調査には「受付」と書いてあったはず…

さほど広くもないクリニックの待合室をざっと見渡した。

だが、そこに美桜らしき姿は見当たらない。まだ午前中の診察が終わっていないため、外に行っているとも考えにくい。ならば院長のところか。

好奇心を丸出しにした受付の女性に聞くのは気が引けたが、ここは仕方ないと諦めた。

「すみません、こちらの赤嶺美桜さんにお会いしたいのですが」
過剰にならない程度の笑顔を向け、柔らかい言い方を意識した。
受付の女性ふたりは美桜の名前を聞くと、先ほどまでの笑顔を急に曇らせお互いに目を合わせた。特に何も言わなかったがお互いの気持ちは通じたようだ。

「：彼女、赤嶺は本日休暇を頂いています。お急ぎの用ですか？
よろしければ代わりに伺いますか」

「休みですか。差し支えなければ理由を聞きたいのですが…」
「申し訳ありませんが、お答えできません」

大輝は溜め息が出そうになった。まさかここにいないとは考えていなかったからだ。

これ以上詮索しても意味がないだろう。目の前の彼女たちは大輝のことを好奇の目で見ている。一体何者なのか、美桜とどんな関係なのか、自分が長居することで良からぬ噂が立ってはいけない。

諦めは肝心だ、「そうですね」と会釈すると受付に背を向けて歩き出した。

背後では何やら女性の小声で美桜の話をしているのが聞こえた。
きつとあれこれ想像して好き勝手に喋っているに違いない。

院内に踏み入れたとき、彼女の姿が見えなかった時点で帰るべきだったと後悔した。

#7 - 迷い -

薄暗い地下駐車場の奥で一台の車が止まっていた。

運転席に人が乗っているがエンジンはかかっていない。次々に入庫してくる車が目の前を通り過ぎるのをぼんやりと見ていた。ときどき照らされるライトに目を瞑りながら。

さて、どうしたものか…

まったく予定が狂ってしまった。

忘れ物の傘を届けに来たというのを口実にランチを一緒に、と誘おうと思っていたからだ。昨日は断られたが「昼食」なら子供を理由に断られることはない。

美桜の性格からして、同僚や職場仲間の見ている中では無下に断ったりしないだろうと踏んでいたのだ。

行き先の決まらない車は駐車場から動けず、目の前のデジタル時計はただ時間が過ぎるのを表示していた。ダッシュボードから煙草を取り出し火を点ける。ほんの少し開けた窓から煙が逃げるように流れていった。

自宅の住所もすでに調査済みだ。だからといって向かう気にもなれない。おそらく母親がいるだろうし美桜の娘もいるだろうと思うと足が向かなかった。

「…昨日、ケータイくらい聞くべきだったな…」

おもわず独り言が漏れた。

調査書にはもちろん携帯番号も記載されていたが、勝手にかけるわけにはいかない。これはあくまで緊急用だ。突然かけて不審に思

われてはいけない。我ながら自分の不器用さに失笑した。

大輝は学生時代から美桜のことが気になっていた。

最初は高等部から入学した彼女たちのような存在が珍しいのだと思っていた。だが、思っても見なかった出来事で美桜の近くに足を踏み入れたとき、そうではないと確信した。

麗しい外見に加えて行動力がある。笑顔の絶えない彼女は決して八方美人と言うわけではなく、腹の底に何も隠し持たないまるで「女神」のようだった。

誰も信じない、誰にも心を開かない、そんな大輝の心を凍てつかせていた氷をいとも簡単に溶かせたのが美桜だった。

だが、その彼女が学生生活半ばにして去っていった。しかも自分の従兄弟との間に子供をもつけたと聞いたときは複雑な心境だった。ひとり勝手に想いを募らせていた大輝は気持ちをぶつける場所もなく、それでも身内として近くにすることに安堵した。

それなのに、三年前に彼女との唯一の繋がりである達哉が他界した。

大輝は従兄弟の死よりも、美桜と会えなくなることに気をとられていた。従兄弟に対して薄情だと思いつつも、彼女にもう一度近づく方法はないかと考えた。

そう…墓地公園で会ったのは偶然ではない。

大輝が彼女に対して行った調査書の報告を見て、自然を装いあの場所に現れた。

「…仕方ないな」

いつまでもそこに留まっているわけにもいかず、エンジンをかけ地上に出た。

車を走らしてみたら住宅街に入る国道の路肩に停車した。さすが

に車を潜ませる場所はないだろうと考えナビで住所を確認し、前を通り過ぎて様子を見ることにした。

美桜の自宅はクリニックからそう離れていない閑静な住宅街の中にあつた。大輝の実家ほどではないがそれなりの家が立ち並んでいる。

東と南に道路がある角地に建っている二階建て・現代風の洋館だった。

案の定、車を潜ませるような場所はなく一度前を通り過ぎてみた。庭のほうに人影が見えたがそれは美桜ではなかった。

…賭けてみるか。

おそらく体調を崩して仕事を休んでいるのだろうと思った。ならば家にいるはずだ。

自然を装い見舞いに行く、と言い聞かせもう一度車を赤嶺邸へと走らせた。

一回りした後、門の前に停車した。

先ほど見えていた婦人の姿はなく自宅前は静まり返っていた。インターホンを鳴らすとしばらくしてから「はい」と女性の声が響いた。母親の声だ。

「日下と言います。美桜さんの様子を伺いに来たのですが」
「…しばらくお待ちください」

少し間があつたことに気が付いた。聞いたことのない名前だったのだろう、誰なのか彼女に確かめているはずだ。やはり今日は自宅にいたのか、と二階の窓を眺めた。

それからかなり待たされた。美桜が会いたくないとでも言っているのだろうかと不安になったが、ゆつくりと玄関が開き中から母親が現れてホツとした。

「あら…お車なんですね、こちらの駐車場に止めていただだけますか？」

「ええ、わかりました」

どうやら家に入れてくれるようだと思堵した。

玄関を入ると円形になっているリビングへと通された。

「すみません、本当ならあちらの応接室にお通ししたいんですけど…今日は美桜の体調が優れなくて、わたくししかお相手できませんが」

申し訳なさそうに言いながらテーブルに紅茶のカップを置いた。

「いえ、突然お邪魔したのは僕ですから気にしないでください」

「昨日はわざわざ送っていただいたとかで…美桜が世話になったようで、ありがとうございます」

「美桜さんの様子はいかがですか？」

「ええ、もう熱も下がりましたし少し休めば大丈夫だと主人が申しっております。本当にご心配おかけしました」

美桜が途中で降りてしまったため雨に濡れて風邪をひいたのだと予想できた。彼女は母親にたいしてどのように話したのか気になったが、好意的に迎えられているのでそう心配することはないだろうと思いをめぐらせていた。

できれば美桜の顔をひと目見たかったが、どうやら叶いそうにないと諦めていた。

8 - 接近 -

美桜の母親・赤嶺涼子あかみねりょうこは話し好きだが落ち着きのある夫人だった。大輝の母親や親族の婦人たちのような傲慢なプライドはなく、とても品のある女性だと感じた。

すっかり意気投合したふたりだったが、その間に美桜が下りてくることはなく時間だけが過ぎる一方だった。

…まあ、今日はこれでも収穫ありか。

母親に気に入られることは悪いことではない。美桜本人が固く拒絶するのなら周りから攻め落としていくのも有効な手段だ。そう気持を切り替えた。

「…では、僕はこの辺で失礼します」

「え？ もうですか？ もっとゆっくりなさっても構わないんですよ」

「いや…ですが」

そう言いながらチラッと時計を見る素振りを見せた。長居したようで、時刻はすでに十五時を回っている。この辺りが引き時だろうと考えた。

「あら、もうこんな時間だね。引き止めてしまっでごめんなさいね、本当はもっとゆっくりしていただきたいんですけど…そろそろ孫を迎えにいかなくてはならないので」

「どちらですか？ 僕が行きますよ」

「え？ えつと…桜ヶ丘ですが」

涼子は驚いた顔で見ている。

すでに調査済みで、美桜の娘・葵が私立桜ヶ丘学園の幼稚舎に通っていることは知っていた。それにそろそろ迎えに行かなければならない時間だということも。

「でも…そんな、申し訳ないですわ」

「構いませんよ、どうせ僕は学生ですし時間はいくらでもありますから。今日は美桜さんの体調が優れないのですから、お母さまはそばにいてあげてください」

「そう…？ だったらお言葉に甘えてもいいかしら？ あちらにはわたくしから連絡しておきますわね」

涼子はよほど大輝のことを好青年だと気に入ったのか、すんなり応じた。美桜がこの場にいれば問答無用で却下されていたかもしれないと思うと、母親の性格に感謝したいところだった。

「いえ…その必要はないと思いますよ。あそこなら僕が疑われることはないと思いますから」

「え？ は、はあ…」

につこりと微笑むと涼子はあいまいな返事をして、それ以上は何も言わなかった。大輝がすぐに立ち上がりリビングから出てしまっただけもあるが。

では、と一言告げて大輝は車を走らせた。

念のためと、幼稚舎に連絡を入れた涼子だったが大輝の名前を告げると「はい、わかりました」と明るい声で返され面食らった。

大輝の特徴など聞かれると思っていたが、彼の言うとおり連絡の必要はいらなかったようだった。

大輝が門の外に出てしばらくした後。

美桜の様子を見に行こうと階段に足をかけた涼子は、二階から顔色の戻った美桜が下りてくるのを目撃した。熱が下がったのかずいぶん楽そうな表情である。

「あら、美桜。もう起きてきて大丈夫なの？」

「うん…熱も下がったみたいだし大丈夫よ。あの人…日下さん、もう帰ったんでしょ？」

まだ少し寒気がするせいか、美桜は両手で腕をさすりながらゆっくりと階段を下りてきた。

リビングに置いてあったカーディガンを手渡すと、涼子は温かい飲み物を用意するわね、と言ってダイニングへと移動した。

壁にかけてある時計を見て、美桜はおや？と思った。

「…お母さん、葵の迎えは？」

普段なら遅くてももう家を出ている時間だ。美桜は自分の体調が優れないため、父が気を利かせて迎えにでも行ったのだろうかと思っただ。

だが、涼子の口からは予想もしていなかったことを聞かされる。

「ああ、葵なら日下さんが迎えに行ってくれたわよ」

「…え？」

ふたりの表情は対照的なものだった。

「そんな…悪いじゃない。どうしてお母さんが行かなかったの？」

「だって、なんだか断り切れなくて…それに日下さんって信用のある方なのねえ。幼稚園に違う者が迎えに行きますからって連絡入れたとき、彼の名前を出したらふたつ返事だったわよ。ビックリしちゃった」

「この学園も警戒心が強く、迎えに来た人間が違うとまず親に連絡を入れるようになっていた。」

「セキユリティー管理のため、基本的には代理人は不可だ。だが、家族側にも都合というものがある。そこで稀にこういったことが起こるのだが、事前に連絡したときに名前や住所はもちろん、どういった関係の人物かまでしつこいほど聞かれる始末だった。」

「それでも学園側が少しでも不審だと感じると代理人には子どもを預けないこともあった。とはいえ多くの生徒は使用人や執事たちが迎えに来るので、葵のような生徒は稀だが。」

「…そりゃ、そうよ…だって、彼は達哉の従兄弟なんだから」

「美桜は言いにくそうに涼子の顔を見ないで言った。」

「葵が通っている幼稚園は達哉の伯母夫妻が経営している私立学園だ。大輝にとつては母親の妹夫婦が経営しているわけだから名前くらいは通っているのである。」

「鷹城家から籍は抜かれたが、葵はあちらにとつても可愛い孫であることには変わらない。教育熱心な両親は達哉が他界した後も葵だけには苦労させたくない」と、桜ヶ丘への入学を薦めてきた。」

「あら、そうだったのね。もう…それならそうと言ってよ、お母さん恥かしいっちゃったじゃない」

「…ごめん」

「まあ、いいわ。帰ってきてからきちんとして挨拶させてもらうから。せっかくだし、一緒に夕食どうかしらね？　なんだかそのまま帰ってもらうのも悪いわ」

「美桜が何か言いかけたが、何も聞かずダイニングへと消えていった。」

「…相変わらず、強引なんだから。断ってくれないかな…」

無理かもしれないな、と思いつながら葵が今どんな心境なのだろうと窓の外を見た。

突然知らない人が来て泣いてなければいいけど。

人見知りする我が娘の、泣いた顔が一瞬頭をよぎった。

その頃

葵の目の前には知らない男性が笑顔で立っていた。

「こんにちは、葵ちゃん」

「葵ちゃん、今日はお祖母ちゃんの代わりにこのお兄さんがお迎えに来てくれたのよ」

そう紹介されたが笑顔で「はい」と返事をするはずもなく、警戒した表情で大輝のことを見上げていた。担任の女性教諭の手を握ったまま。

「お兄さんのことが…怖いのかな？」

大輝はしゃがんで葵の目線になった。葵はとっさに女性の後ろに隠れるように身を動かした。

「…だって、知らない人だもん。ママが知らない人にはついていっちゃダメって言ってたもん」

「そっか…困ったなあ」

手を握ろうと差し出したが逆効果だったようで、さらに身を隠そうとした。

人見知りが激しく、なかなか懐かないと調査書にも書いてあった。かなり警戒心が強いらしく幼稚舎に入っつてすぐは教諭たちにも懐かず苦労したそうだった。

だが、鷹城家の血を受け継いでいるため両親にすぎるわけにもいかない、教諭たちの苦労を美桜は知らない。

だが、葵の手を握っていた女性はこの彼女の反応に驚いていた。普段なら初めて会った人や知らない人には話すこともないからだ。

その葵が自分の意見を言っていることが不思議で思わず見下ろした。内心では「やっぱり血の繋がりがわかるのかしら」などと感心していた。

葵は目も逸らさず大輝の顔をじつと見つめていたがそれは無意識にしていることだった。なぜか目が離せない、子供ながらに何かを感じているようだった。

そんな彼女に大輝はさらに優しい笑顔を向け、ゆっくりと話し始めた。

「葵ちゃん、お兄さんはパパの従兄弟なんだよ。イトコ、ってわかるかな?」

「…パパ?」

家で口にする誰もが困った顔をする台詞だった。葵は美桜はもちろん祖父母の前でも達哉のことは言わないようになっていた。なぜか美桜が哀しい表情に変わるからだ。

「お兄ちゃん、パパのことしてるの?」

やはり従兄弟というのがどういうものなのかはわからなかったよ
うだ。

「そうだよ、パパの親戚なんだ。パパのお祖父ちゃんとお祖母ちゃんには会ったことあるかな?」

「うん、あるよっ」

「そうそう。あの人はね僕のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんでもあるんだよ」

「ほんとっ!?!? すごいっ!?!?!」

身を隠していた葵は瞳をきらきらと輝かせながら大輝のことを見
ていた。

どうやら達哉の話をするのが嬉しいようで、葵の手はすっかり
女性から離れていた。

葵は月に一度、鷹城家の本邸に招かれていた。と、言っても葵本人だけで美桜は呼ばれない。

今の鷹城家は達哉の父親が長男であるため跡を取っている。そして祖父母も健在で、ふたりにとつて葵は内孫の子になる。

達哉には誠也しんやという兄がいるがそちらはまだ独身だ。そのため祖父母たちは葵が可愛くて仕方ない。今後、誠也の婚姻如何で葵が鷹城家に引き取られる可能性はゼロではなかった。

そのため、葵が鷹城家から帰ってくると、美桜は「無事帰ってきた」と安堵する。その日はかりは落ち着いていられないのだった。

いきなり手を引いて車に乗せるのはどうだろう、と思った大輝はしばらく園内で葵と話すことにした。少女も祖父母の話が出来て嬉しいのか、先ほどから終始笑顔で大輝を見つめている。

この子は達哉さんのこと、知らないんだっけ…

最初に「パパ」と言っただけで、その後はずっと鷹城の家に遊びに言ったときの話をしていた。おそらく家でも遠慮して達哉のことは話さないように、気を遣っているのだろうと察していた。

葵が尋ねるまで何も言わないでおこうと、ただ黙って笑顔で頷いていた。

葵が定期的に鷹城家に入入りしていると知ったのは、達哉が他界して一年ほどたったときだった。

大輝は美桜と一緒に来ているのではないかと、特に用もないのに鷹城家に出向いた。だが、一度たりとも願いが叶ったことはない。

いつも桜ヶ丘学園まで執事が迎えに行き、葵ひとりを連れてきていた。人見知りする彼女だが、身内にはそれほどでもなくすぐに懐いたという。

一度、どうして母親は一緒じゃないんだとそれとなく聞いてみたことがある。

返ってきた言葉は大輝には理解できないものだった。

この子は達哉の死を知らない。

今も遠くで生きていると聞かされている。

だが、美桜は達哉の名残を見て哀しい顔をする。それを葵に見せたくない…と。

達哉の死を隠そうと、誰が言い出したのか大輝には大方予想がついていた。いつかわかるのに、いつか話さなければならぬのに、問題を先送りしているだけで何の解決にもならないのに、と思ったが従兄弟とは言え口を出すことはできなかった。

美桜がひとり、哀しい思い出を背負っているのかと思うと大輝の心は沈んだ。だが、きっと彼女のことだからそれすらも苦痛だとは思っていないだろう。

嬉しそうに祖父母の話をする少女を見ながら複雑な気分に関われていた。

「お兄ちゃん、おうちにかえろっ?」

ぼんやりしていたのか、不意に投げられた台詞に戸惑った。

だが、すぐに笑顔を見せて立ち上がり手を引くと、ゆっくりと歩き出した。

「ただいまー」

門の外に見慣れない車が止まると、助手席から笑顔いっぱい少女が降りてきた。普段よりも一時間ほど帰りが遅く心配していた美桜だが、当の本人はご機嫌な様子だった。

娘のこんな嬉しそうな表情は久しぶりに見るかもしれない、と美桜は思った。

「ママ、お兄ちゃんとかね、たくさんお話したんだよ」

「そう…よかったわね」

「うん！…！ おつきいじいじとばあばの話もしたよ。あとね、あとね…」

少し興奮気味で話す葵を見た涼子は「先に着替えようね」と言って二階へと連れて行った。

いつもなら帰宅後すぐに自分の部屋に行き大人しくしている葵だが、今日ばかりはそれすら忘れてしまっただけ嬉しかったのだ。

リビングに残された美桜を大輝は何を話すわけでもなく、黙ったままカップを手にしていた。美桜は不思議な気持ちで大輝を見ている。

…あの子があんなに懐くなんて…

驚きは隠せなかった。

玄関から入ってくるなり笑顔で飛びついてきた娘に動揺した。ときり泣いていると思ったからだ。とっさに反応できずばんやりしてしまった。

その背後で立っている大輝の顔を見て「何をしたのだろう？」と

勘繰ったりもした。

だが、特に物で釣った形跡もなく純粹に祖父母の話などで打ち解けたらしく、返ってきた葵は「みんなで食べよう」と言いながらケーキの箱を差し出した。

こんな小さな子とケーキショップに入ったのかと思うと可笑しかった。ずいぶん若いお父さんだと思われただろうか、それとも親戚のお兄さんだろうか、美桜は妙なことが気になった。

その風景を思い浮かべてしまったのか、うふふと笑ってしまった。すぐに口元を押さえたがその笑い声は大輝にも聞こえていた。

「よかった、元気になりましたね」

「え？ ええ…ありがとうございます」

恥ずかしかったのか美桜は俯きながら礼を言った。

大輝のほうが年下なのだから敬語の必要はないのだが、つい相手に合わせてしまう癖が出ていた。

「今日はわざわざありがとうございました。それに葵の迎えまで行ってもらって…なんだか申し訳ないです」

「美桜さんが気にすることはありませんよ、僕が好きで行っただけです。あ、そうそう。昨日車に傘を忘れて帰られたでしょう？」

あの後雨が降ってきたので気になっていました。風邪をひいたのなら僕のせいかもしれませんね…すみませんでした」

突然謝られて「いえ」と美桜は首を横に振った。「日下さんのせいじゃありませんから」と言うと室内は再び沈黙に覆われてしまった。

そう言えば、祖父母の話をしてたって言ってたけど…

達哉のことは話してないのかしら…？

不意に不安がこみ上げてきた。まさか大輝が美桜のことを調査しているとは思ってはいないため、彼は何も知らないと思ったからだ。だが、帰ってきたときの葵の様子から他界したことなどの話はしていないように感じた。葵がいない今のうちにそれとなく聞いてみることにした。

「あ、あの…日下さん？」

大輝は美桜の顔を見て首を傾げただけで、特に何も言葉は発しなかった。だが、その表情から「何でしょう？」と言われている気がした。

「葵に達哉のことは話されましたか？ あの…どう言っているのかわからないんですけど…」

美桜の聞きたいことがわかったのか大輝は「ああ」と言っていて「心配ないですよ」と付け加えた。それだけではうまく伝わらなかったらしく、今度は美桜が首を傾げてしまった。

「僕が達哉さんの従兄弟だという話はしました。葵ちゃん、人見知りか激しいのか警戒心が強くて…僕のこと知らない人だから一緒に帰らないって、言われたものですから。でもそれ以外のことは何も話していませんよ、彼女が何も知らないのは知っていますから」

その台詞を聞いた瞬間、「え？」と美桜の表情が曇った。

「祖父から聞いたことがあります。達哉さんのこと隠してるって…まあ、あの人が黙ってようって言い出したんでしょうけど。だから何も話していませんよ」

「そう、でしたか…なんだか気を遣わせてしまってますみません」
「なんだか大輝には謝ってばかりだと思った。」

ちょうど会話が途切れた頃、制服から着替えた葵がリビングに入

ってきた。

いつもなら美桜の隣に座るが、今日はなぜか大輝の隣に引付くように座り笑顔で彼のこと見ていた。やはり父親という存在が愛しいのか、と美桜は心苦しくなっていた。

ダイニングでは涼子がケーキと紅茶の用意をしていたので、手伝おうかと美桜は席を立ったが「無理しなくていいわよ」と断られた。自分の家なのになんとなく居辛い。娘の葵はすっかり大輝と意気投合したのか楽しそうに話している。ひとり取り残されているようで退屈だった。

「ママ、もうお熱はさがったの？」

「え？ うん、もう大丈夫よ。お祖父ちゃんがちゃんとお薬出してくれたからね」

「そっかあ、じゃあお兄ちゃんといっしょにご飯、たべれるねっ」
無邪気な顔で言った台詞には美桜同様、大輝も驚かずにはいられなかった。

…お母さんったら、葵に言わせて…

涼子はただ、ニコニコと微笑みながら孫の言動に耳を傾けていた。とても満足そうな顔をして。

葵の言葉をとめることが出来ず、美桜は完全に返す言葉を失っていた。

煙草を吸うために車に戻った大輝は、窓を少し開けて煙を吐き出した。

やがて耳に当てていたケータイを下ろすと無造作に助手席へと放り投げた。思うようにことが運んでいるような、そうでもないような事態に苛立ちが募る。

…どうも、彼女には避けられてる気がする。

幸いまわりの人間は好意的に受け止めてくれている。だが、肝心の美桜は一向に大輝に心開く様子がなかった。焦っても仕方がない、まだ出会ったばかりなのだから仕方ないと言い聞かせていた。

達哉の妻となった美桜を諦めていたのに、いつの間にか恋心が復活していた。

自分でもわからなかった。世の中に女はそれこそ星の数ほどいる。だが大学でも飲み会でも両親の薦めでも大輝の心を開くような相手はいなかった。

誰と話していても近づいてくるのは「大輝個人」ではなく「日下家の長男」いわば、家が目当ての人間のほうが多かった。わかつてはいたが多少うんざりしていた。

焦ることはないか…

彼女の心には、まだ達哉さんがいるみたいだし…

愛する人が突然いなくなる、という感覚が大輝にはわからなかった。まだ死に直面したことがないわけではなく「大事な人の死」を経験したことがないからだ。

もちろん従兄弟が突然の事故により他界したことは衝撃的であった。未来は当たり前のようにやってくると信じている十代、身近な人間の死は確実に心に刻まれた。

だが、それも幾らか月日が流れれば自然と悲しみの傷は癒えてゆく。それでももつと身近な人間、たとえば達哉の両親や祖母などは未だに哀しみの中にいた。

彼女の心から完全に達哉を追い出すことは出来ない。

それがわかつている上で、今することは彼女との接点を閉ざさないことだった。

車を降りて玄関を開けると、そこには葵が立っていた。

いつからいたのだろうかと大輝が聞くと、「お兄ちゃんがでていつから」と答えた。どうやら帰ってしまうのではないかと心配していたらしい。

「心配かけてごめんね」そう言うと大輝の手をとり、リビングへと引っ張られた。

すっかり懐いた孫の姿を微笑ましく見ていた涼子だが、それに対してまだ具合が悪そうな美桜は無表情で座っていた。

「ママ、まだ頭いたいの？」

「葵が心配することはないのよ、ただ…ちょっと疲れちゃったかな。ママ、お部屋に戻ってもいい？ いい子にできる？」

「うん。葵、いい子にできるよ。ママは寝ててもいいよ」

話しながら美桜はチラツと大輝の顔を見た。自分の見舞いに来てくれておまけに娘の迎えにまで行ってもらっているのだ。帰って欲しいと思っただけでも言葉にはできず、それでも居心地が悪いためその場から逃げるには自室に戻るしかないと考えた。

「僕のことなら気にしないでください。気分が優れないんでしたら

ゆっくり休まれたほうがいいですよ。僕も適当に帰りますから」

すると傍で「かえっちゃイヤだ」という葵の言葉が返ってきた。頭をなでながら美桜に微笑むと奥のダイニングから顔を出した涼子が美桜に声をかけた。

「そつよ、まだ熱が下がったばかりなんだから上で休んでなさい。

…日下さんはどうぞゆっくりしていつてくださいね、葵もすつかり懐いちゃって…お夕食、口に合うかわかりませんが」

「いえ、お構いなく」

ふたりのやり取りを聞いていた美桜はゆっくり立ち上がり「それじゃあ、失礼します」と言ってリビングを後にした。

部屋に戻ってベッドに潜り込んだ美桜は、疲れからかいつの間にか眠ってしまった。

ふと目を覚ましたときには外はすっかり闇に包まれていた。そつと扉を開けて階段下の様子を伺ってみると何やら楽しげな話し声が響いていた。

まだ大輝がいるとわかり扉を閉めて再びベッドへ戻った。しかし眠気が襲ってくるわけでもなく、薄暗い部屋でぼんやりと天井を見ていた。

ふと、借りていたハンカチのことを思い出した。

そういえば昨日帰ってきてからすぐにシャワーを浴びた。あの時かばんから出したかどうか記憶があやふやだった。ベッドから腕だけを伸ばし手探りでかばんを引き寄せ中を確認した。

あ…やっぱり、ここにあった…

濡れた状態でかばんに入れたからだろうか、少しシワになっていた。

連絡先を聞けずにしたためどうしようか悩んでいたが、今日相手が来るのがわかっていたらそんなことに頭を使わずにさっさと洗濯していたのに、と見当違いな理由をつけていた。

どうしてももう一度会わなければならぬみたいだ。そう考えながらハンカチを見つめていると扉の開く音がした。

「美桜：起きてたの？ だったら下りてくればよかったのに。まだ具合が悪いのかしら？ お父さん、帰ってきてるわよ。診てもらおう？」

「ううん、平気。それよりお母さん…これ、洗濯しておいて」

「あら？ こんなハンカチ持ってた？」

「私のじゃないわよ。昨日日下さんに借りたんだけど…かばんに入れたままになって。それに連絡先聞いてなくて、どうやって返そうか悩んでたところ」

涼子はそのハンカチを受け取って美桜が思いもしなかった台詞を口にした。

「ああ、それなら大丈夫よ。さっきお父さんが連絡先聞いてたわ、よっぽど気があったのね」

美桜はどういういきさつでそんな流れになったのか、皆目見当もつかなかった。驚きすぎてもう何も言えなかった。自分の父にも、そして大輝に対しても。

それでも美桜はまだ、大輝との繋がりはそう長く続かないと思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204k/>

愛を忘れた女神

2010年10月9日23時46分発行